

看護学実習の経験がもたらす社会人基礎力の自己評価の変化

仲田紀代美*¹ 草地由佳*¹

要旨：本研究は、岡山県 A 専門学校（以下、A 校）の看護学実習の経験がおよぼす社会人基礎力の変化を明らかにすることを目的とした。対象は、A 校 3 年生を対象とし、実習前と中間および実習後の 3 時点において【前に踏み出す力（アクション）】、【考え抜く力（シンキング）】、【チームで働く力（チームワーク）】の 3 つの能力について、アンケート調査をし、自己評価を比較検討した。その結果【前に踏み出す力（アクション）】、【考え抜く力（シンキング）】、【チームで働く力（チームワーク）】は、実習前と中間および実習前と実習後に有意な差が認められた。【チームで働く力（チームワーク）】は、有意な差が認められなかった。このことから、看護学実習の経験は、【チームで働く力（チームワーク）】の効果を実感するに至らないことが推察された。今後、看護基礎教育において【前に踏み出す力（アクション）】、【考え抜く力（シンキング）】、【チームで働く力（チームワーク）】は、実習前期の教育方法の工夫が一層の自己評価の向上につながるとともに、【チームで働く力（チームワーク）】の育成に向けた教育方法を検討する必要性が示唆された。

キーワード：社会人基礎力，看護学生，看護学実習，自己評価

はじめに

社会人基礎力とは、2006 年に経済産業省が提唱した「職場や社会の中で多様な人々と共に仕事をしていくために必要な基礎的な能力」という考え方である¹⁾。この考え方は、現代の若者を取り巻く環境の変化を背景として発表されたものであり、【前に踏み出す力（アクション）】、【考え抜く力（シンキング）】、【チームで働く力（チームワーク）】の 3 つの能力と 12 の能力要素からなっている。2018 年には年々変化する人口構造の変化や AI 技術の進歩といった若者を取り巻く社会の変化を背景に、「どう活躍するか」「どのように学ぶのか」「何を学ぶのか」の視点が加えられた¹⁾。この社会人基礎力が提唱されて以降、社会人基礎力と看護学実習などの何らかの取り組みが社会人基礎力の向上に向けて効果があることがわかっている^{2,3)}。

箕浦・高橋らは基礎教育で基礎学力を身につけ、専門教育機関で知識・技術を身につけ、その知識や技術を活かすために必要な力が社会人基礎力である⁴⁾と述べている。また、看護実践者が成長するためには、“現場で”主体的に考え行動し、多くの人々とのかかわりやさまざまな“経験”通して学ぶことが大切である⁴⁾と述べている。

一方、新人看護師の早期離職率は依然高い傾向にあり、離職理由として、看護師の以外の職への興味関心や精神的理由による自分の健康(精神的理由)が上位に上がっている⁵⁾。また、柏田らは、新人看護師の早期離職の理由の一つとして、①職場の理想と現実との乖離、多くの技術を早期に習得しなければならない、②自身の技術の未熟や技術の習得困難

*1 玉野総合医療専門学校 保健看護学科

感、技術が早期に習得できないことからの、③自信喪失や先輩看護師との関係性が悪化、④ストレスが及ぼす心身のバランス崩壊、自身の限界^④と述べている。高橋は、看護職が一生学び続ける職業である以上、自ら学び、自ら考え、自分のキャリアを自分で意思決定し、人と関わる力を養い、自ら能力を身に着け、チームで生き生きと活躍することができることが大切であると指摘しており、その力が社会人基礎力である^④と述べていることから新人看護の早期離職の理由の一つとして看護基礎教育における社会人基礎力の育成が影響している可能性が考えられる。

以上のことから、社会人基礎力の育成は看護基礎教育において重要であり、看護職として成長し続けるための土台作りにつながるのではないかと考える。特に、看護学実習は必修科目であり、看護職者が行う実践の中に学生が身を置き、看護職者の立場でケアを行うという学びの特性から考えると、看護学実習の経験は学生の社会人基礎力の育成に大きな影響があるのではないかと考えられる。

社会人基礎力と看護学実習の関連についての看護研究は実践報告が多くみられるが、評価スケールは3段階や5段階のものであった。今回、経済産業省が示した社会人基礎力の3つの能力と12の能力要素について岡山県A専門学校（以下、A校）保健看護学科3年生を対象に実習前、中間、実習後に7段階のリッカート評価を用いて自己評価を行った。

研究目的

本研究は、A校保健看護学科3年生の看護学実習経験がもたらす社会人基礎力の自己評価の変化を明らかにすることが目的である。その結果は、看護学実習における教育方法の工夫の一助となると考える。

調査方法

1. 対象

A校保健看護学科3年生39名（男性3名、女性36名、年齢20代38名、40代1名）を対象とした。

2. 倫理的配慮

対象となる学生には、研究の目的及び内容、研究参加へは自由であること、不参加でも不利益のないこと、収集したデータは研究目的以外では使用しないことを口頭及び、文書で説明した。調査は無記名とし、回答をもって研究への同意を得た。なお、本研究は玉野総合医療専門学校の承認（研究計画番号：2023005）を得て実施した。

3. 調査時期と調査方法

A校保健看護学科は4年制の専門学校であり、3年次の実習は5月から7月（前期）にかけて3科目、9月から11月（後期）の期間で3科目の実習を行う。調査時期は、5月の実習前（以下、T0）、7月の実習中間（以下、T1）、11月の実習後（以下、T2）の3回とした。

調査方法は、経済産業省が示す社会人基礎力を問う 36 項目を無記名、自己記入式質問用紙を Google Form を用いた Web 調査を実施した。

4. 調査内容（表 1）

経済産業省が提示している社会人基礎力について【前に踏み出す力（アクション）】は 3 項目、【考え抜く力（シンキング）】は 3 項目、【チームで働く力（チームワーク）】は 6 項目について、アンケート調査を行った。評価項目 7 段階のリッカート調査とし、1：非常に当てはまる、2：とても当てはまる、3：やや当てはまる、4：どちらでもない、5：やや当てはまらない、6：とても当てはまらない、：非常に当てはまらないとした。

5. A 校 3 年次の看護学実習の概要

A 校の看護学実習は、1 年次に基礎看護学実習 I（1 単位 30 時間）、2 年次に基礎看護学実習 II（2 単位 90 時間）、老年看護学実習 I（2 単位 90 時間）の実習を行い、3 年次に 6 科目の実習を行っている。3 年次の実習の概要は以下の通りである。

1) 実習科目

成人看護学実習 I（周手術期）、成人看護学実習 II（回復期）、成人看護学実習 III（慢性期・終末期）、母性看護学実習、小児看護学実習、精神看護学実習の 6 科目。

2) 単位数

各科目とも 1 単位 90 時間

3) 実習方法

5 月～7 月に 3 科目、9 月～11 月に 3 科目の履修

1 グループ 6～7 名編成で、科目履修に順序性はなく、各科目をローテーションする。実習のすすめ方の例を表 2 に示した。

表 2 実習のすすめ方の例

1 週目	情報収集 情報の解釈・分析 看護計画の立案 カンファレンス
2 週目	看護計画に基づいた看護実践 評価および看護計画の修正 カンファレンス
3 週目	看護計画に基づいた看護実践 評価および看護計画の修正 カンファレンス

学生は、看護計画や実践した看護については適宜実習指導者及び、科目担当教員に報告や連絡、相談を行う。

6. 分析方法

分析は、社会人基礎力の前に踏み出す力（アクション）、考え抜く力（シンキング）、チームで働く力（チームワーク）の 3 つの因子ごとに合計点数を算出し、T0、T1、T2 で比較した。その際の検定は、Kruskal-Wallis 検定を用い、Post-hoc test は Holme 法を採用し、有意水準は両側検定で 0.05 未満とした。解析ソフトは HAD15.0 を用いた。

表 1. 社会人基礎力の構成要素²⁾

能力	能力要素	定義	発揮できた例（具体的な行動例）
前に踏み出す力（アクション）	主体性	物事に進んで取り組む力	<ul style="list-style-type: none"> 自分がやるべきことはなにかを見極め、自発的に取り組むことができる 自分の強み・弱みを把握し、困難なことでも自信をもって取り組むことができる 自分なりに判断し、他者に流されず行動できる
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力	<ul style="list-style-type: none"> 相手を納得させるために、協力することの必然性（意義、理由、内容など）を伝えることができる 状況に応じて効果的に巻き込むための手段を活用することができる 周囲の人を動かして目標を達成するパワーを持って働きかけている
	実行力	目的を設定し確実に実行する力	<ul style="list-style-type: none"> 小さな成果に喜びを感じ、目標達成に向かって粘り強く取り組み続けることができる 失敗を恐れずに、とにかくやってみようとする果敢さを持って、取り組むことができる 強い意志を持ち、困難な状況から逃げずに取り組み続けることができる
考え抜く力（シンキング）	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力	<ul style="list-style-type: none"> 成果のイメージを明確にして、その実現のために現段階でなすべきことを的確に把握できる 現状を正しく認識するための情報収集や分析ができる 課題を明らかにするために、他者の意見を積極的に求めている
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力	<ul style="list-style-type: none"> 作業のプロセスを明らかにして優先順位をつけ、実現性の高い計画を立てられる 常に計画と進捗（しんちよく）状況の違いに留意することができる 進捗状況や不測の事態に合わせて、柔軟に計画を修正できる
	創造力	新しい価値を生み出す力	<ul style="list-style-type: none"> 複数のもの（もの、考え方、技術など）を組み合わせ、新しいものをつくり出すことができる 従来の常識や発想を転換し、新しいものや解決策をつくり出すことができる 成功イメージを常に意識しながら、新しいものを生み出すためのヒントを探している
チームで働く力（チームワーク）	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力	<ul style="list-style-type: none"> 事例や客観的なデータなどを用いて、具体的にわかりやすく伝えることができる 聞き手がどのような情報を求めているかを理解して伝えることができる 話そうとすることを自分なりに十分に理解して伝えている
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力	<ul style="list-style-type: none"> 内容の確認や質問などを行いながら、相手の意見を正確に理解することができる あいづちや共感などにより相手に話しやすい状況をつくることができる 相手の話を素直に聞くことができる
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力	<ul style="list-style-type: none"> 自分の意見を持ちながら、他人のよい意見も共感をもって受け入れることができる 相手がなぜそのような考えるかを、相手の気持ちになって理解することができる 立場の異なる相手の背景や事情を理解することができる
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	<ul style="list-style-type: none"> 周囲から期待されている自分の役割を把握して、行動することができる 自分でできること・他人ができることを的確に判断して行動することができる 周囲の人の状況（人間関係、忙しさなど）に配慮して、よい方向へ向かうように行動することができる

結果

1. アンケートの回収

アンケートの配信は、T0・T1・T2ともに39名に配信をした。回収はT0が36名(92.3%)、T1が35名(89.7%)、T2が36名(92.3%)であった。

2. 実習前(T0) 中間(T1) 実習後(T2)の社会人基礎力3つの能力の比較(表3)

【前に踏み出す力(アクション)】は、Kruskal-Wallis 検定にて有意な差が認められた($P < 0.001$)。多重比較は、T0とT1($P < 0.01$)およびT2($P < 0.01$)に有意な差が認められ、中間と実習終了時には有意な差が認められなかった($P = 0.27$)。【考え抜く力(シンキング)】は、Kruskal-Wallis 検定にて有意な差が認められた($P < 0.001$)。多重比較は、T0とT1($P = 0.01$)およびT2($P < 0.001$)に有意な差が認められ、実習中間と実習終了時には有意な差が認められなかった($P = 0.15$)。【チームで働く力(チームワーク)】は、Kruskal-Wallis 検定にて有意な差が認められなかった($P = 0.62$)。

表3 A専門学校保健看護学科3年生の社会人基礎力得点分布

変数	1回目(n=36)			2回目(n=35)			3回目(n=36)			実習前 実習中 実習後の比較 (クラスカル ルーウォリス 検定)	多重比較 (Holme法)
	中央値	第1四分 位	第3四分 位	中央値	第1四分 位	第3四分 位	中央値	第1四分 位	第3四分 位		
前に踏み出す力 (アクション)	31.0	27.0	34.0	26.0	21.0	27.5	23.0	20.8	27.0	0	T0とT1 (P=0.00) T0とT2 (P=0.00) T1とT2 (P=0.27)
考え抜く力 (シンキング)	32.5	27.8	37.0	27.0	25.0	30.5	27.0	22.8	28.0	0.0	T0とT1 (P=0.01) T0とT2 (P=0.00) T1とT2 (P=0.15)
チームで働く力 (チームワーク)	44.0	36.8	46.3	42.0	37.0	49.5	39.5	32.0	49.0	0.62	T0とT1 (P=0.44) T0とT2 (P=0.54) T1とT2 (P=0.45)

考察

今回の研究は、A校3年生の実習前後の社会人基礎力の自己評価について3回のアンケート調査を実施した。Kruskal-Wallis 検定にて【前に踏み出す力(アクション)】【考え抜く力(シンキング)】に有意な差が認められたが、【チームで働く力】は有意な差は認められなかった。

奥田らは、看護の実践にあたっては、看護となる対象を理解し、対象の状況を判断したり問題を発見したり、必要なケアを見出して計画を立てるなど考え抜く力が要求される。そして、社会人基礎力との相互作用的な関係があることを示唆している⁷⁾。また、市川らは社会人基礎力の育成は、人との交流、異質な世界との出会いや評価を体験させること、

それ自体が育成そのものである²⁾と述べている。このことから考えると、A校の看護学実習においても、学生は患者や多くの医療従事者、看護教員やグループメンバーと日々関わる体験を重ねている。受け持ち患者との関わりにおいては、日々変化する患者の状態を観察、判断し、医療従事者への報告や実践する看護援助の調整を行っている。また、教員や看護師からの質問に思考を重ね、グループ間においてもテーマを基にディスカッションを行うなど、看護学実習そのものが社会人基礎力の育成につながる経験であり、この経験の積み重ねが学生の自己評価につながっていると考える。

1. 3つの能力別に見た考察

1) 【前に踏み出す力（アクション）】

【前に踏み出す力（アクション）】の能力の構成要素は、「主体性」「働きかけ力」「実行力」である。アンケートの結果より T0 と T1 および T2 に有意差が見られた。これは、実習という経験そのものが学生の自己評価につながったと考えられる。A校における看護学実習では、受け持ち対象者の情報収集から解釈・分析、看護計画の立案、看護実践、評価という一連の看護過程の展開技術がどの科目においても行われている。経済産業省は、社会人基礎力の育成に関しての5段階ステップにおいて、社会人基礎力の育成はまず学生が能動的に行動することが大事であると述べられており、その場面を作るために課題や仕事が与えられ、その課題に取り組むことで自尊感情を高め、それが達成感につながると述べている⁸⁾。学生は、日々の実習の中で与えられた課題に取り組むだけでなく、臨床指導者への報告場面などにおいて、その場で課題を提示されることも多い。また、A校の3年次の看護学実習は、実習の概要に示しているようにライフサイクル、病期による看護学実習が展開される。これは学生にとって未知なる経験であるとともに実習に対する不安は大きいと考える。その不安の中で、成功体験や失敗体験を繰り返しながら課題に取り組む学習過程そのものが学生の自己評価の向上につながっていると推測される。これは、T0 と T1 および T0 と T2 の有意な差の結果にも影響していると考えられる。しかし、T1 と T2 では、有意な差が認められていない。この要因として実習への慣れも要因の一つとして考えられるが自己評価であることから、学生自身が自分の成長が認められないと感じていることや、求められる課題は実習が進むにつれて高度なものとなり、能力の限界を感じている可能性も推測される。箕浦・高橋らは、社会人基礎力はさまざまな人とのかかわりで発揮される力であり、意識しないと低下する力である。つまり、一度知識として習得したかのように思っても、無意識に活用することは難しい⁹⁾と述べている。また、経済産業省の示す社会人基礎力の育て方では、課題に対して学生の心に響く承認が必要であると述べており、その方法としてほめるだけでなくほめられない点についてはその理由を伝え、自覚できるようにフォローすることが重要である。また、それだけでなくどのような人に承認されるかが鍵である⁸⁾と述べている。看護学実習は臨床で受け持ち対象者に対して看護実践を行い、行った看護に対して日々振り返りをおこなっている。学生が成功や失敗を繰り返す中で臨床指導者や教員がその経験をいかに承認するかによって学生の自尊感情や自信へとつながると考える。学生が前向きなモチベーションにつながるような臨床指導者や教員の承認だけでなく、学生の成長に合わせた課題の提示や実習方法を考慮し、学生の達成感、自己効力感の向上に向けた関わりを行うことが大切だと考える。特に、T1 から T2 にかけての教育的関りが重要であると考えられる。

2) 【考え抜く力 (シンキング)】

【考え抜く力 (シンキング)】の能力の構成要素は「課題発見力」「計画力」「創造力」である。この能力は、与えられた課題を何度か繰り返し解釈させ、実行させることで思考を深めていき、【前に踏み出す力 (アクション)】の段階ですでに育成されつつある能力である⁸⁾と言われており、このことが学生の自己評価につながったと考える。看護学実習では、受け持ち患者を観察し、患者の全体像を把握することから始まる。そして観察したことをアセスメントし、受け持ち患者に必要な看護について試行錯誤を重ねていく。さらには、日々の看護実践の中で患者の反応を捉えその意味を考察し、患者の状態に合わせた看護となるように思考錯誤を繰り返している。実習中のカンファレンスにおいては、実習のグループメンバーとテーマに沿って話し合い、テーマ内容を深めている。これらの一連の実習内容、つまり、考え続ける場に身を置き実践していることが、学生の自己評価につながったと考える。経済産業省はこの能力の育成のためには、与えられた課題を繰り返し取り組み解釈し、実行する中で思考を深めながら解決に導くプロセスの重要性と、学生を課題に対してどれだけコミットできるように導くことの重要性⁸⁾を述べている。つまり、看護学実習での経験を深める中で考え抜く力を育成するための教育方法を検討し学生の経験の意味づけをしていくことが重要であると考えられる。

3) 【チームで働く力 (チームワーク)】

【チームで働く力 (チームワーク)】の構成要素は、「発信力」「傾聴力」「柔軟性」「状況把握力」「規律性」「ストレスコントロール力」である。

看護において、チームで働く力の構成要素として崎山らは、【お互いの仕事をフォローする】、【チームでの仕事がスムーズに行くように態勢を整える】、【メンバーが働きやすいように行動する】と述べている⁹⁾。また、チーム医療が推進される目的の一つとして医療の質的向上があり、そのためには、①コミュニケーション、②情報の共有化、③チームマネジメントの3つの視点が重要とされている¹⁰⁾。山口は、チームワークを遂行するためには、メンバー間で適切にコミュニケーションを交わしながら、協同したり、連携したり、相互支援したり、情報共有したりする行動が必要となる¹¹⁾と述べている。

一般的にZ世代といわれる学生の特徴として今までの組織中心の思考から変化し、個性の尊重・助け合い・ひとりひとりの丁寧な指導・ほめること・傾聴を職場や上司に求めているという調査結果がある¹²⁾。このことから考えると個性の尊重を求めるZ世代の学生の特徴と看護におけるチームで働く構成要素やチームワークを遂行するための要素に乖離があるのではないかと考えられる。特に、個性を重要視する学生が相手を思い、声を掛け合いながら自ら行動する能力には課題があると推測される。しかし、看護においてチームワークは必要不可欠な要素であることから、看護基礎教育において【チームワーク (チームで働く力)】の育成は必要不可欠であり、学生の特徴を踏まえた教育的かかわりを検討する必要があると考えられる。

看護学実習では受け持ち患者の看護を中心とした実習を行っており、学生自身も自分に課せられた課題に取り組むことで精一杯な状況にある。そのため、他のグループメンバーがどのような対象者を受け持っているのかを知ろうとする余裕や、互いの困りごとを解決しあう相互支援は難しい状況にあり、個性を特に重視するZ世代の特徴から考えると、【チームで働く力 (チームワーク)】の能力の育成は実習だけでは養うことが難しいのではない

かと推測される。山口は、質の高いチームワークの育成に向けた助け合いを妨げる要因として、メンバー同士の助け合いが互いの依存と甘えの関係の構築につながり、その関係を維持するために必要な批判や意見の交換を控え、チーム内に閉ざされた安寧で安定した関係を偏重してしまうメンバーの心理が働くことが考えられる¹¹⁾と述べている。看護学実習では、学生個々の受け持ち対象者への看護を中心として取り組んでおり、自己の役割遂行が中心となっている現状にある。しかし、それだけではこの能力を養うことには限界があると考えられる。実習の経験の中で【チームで働く力(チームワーク)】を養うためには、意図的に連携、協働、相互支援ができる学習を提供することが大切であると考えられる。また、高木は、社会人基礎力は学校以外のアルバイト等の経験、学校外での実習、グループワーク等の「人との関わり」を体験・経験を通じた学びが社会人基礎力の育ちに影響を与える¹²⁾と述べている。つまり、看護学実習の経験だけではだけでなく日々の学習過程の中で様々な場面を通して、学生が【チームで働く力(チームワーク)】を意識できるような教育方法を工夫し続けることが重要であると推測される。

本研究の限界

本研究の対象者は、対象校が1校であること、対象学生数が39名であることから、本研究で得られた結果を一般化するためには、さらに多数の学生を対象とした調査研究による分析が必要である。また、今後、縦断的な研究を行いさらなる検討が必要と考える。

結論

今回、A校保健看護学科3年生の看護学実習の経験が及ぼす社会人基礎力の変化についてアンケート調査を行った。その結果、【前に踏み出す力(アクション)】、【考え抜く力(シンキング)】は有意な差が認められた。また、実習前と中間および実習後では有意な差が見られたが、中間と実習後では有意な差が見られなかった。この結果を踏まえて、実習前から中間にかけて教育的関りの工夫が重要である。加えて、【チームで働く力(チームワーク)】は有意な差が見られなかった。これらの結果から社会人基礎力は実習だけで育成することは難しく、日々の教育活動への工夫が必要である。日々の教育活動の中で、コミュニケーション力を高め、連携、協働、相互支援の必要性を、実習中も臨床実習指導者や教員が社会人基礎力育成に向けた意図的な関りをし続けることが必要である。さらに、A校保健看護学科の学生が、自己評価が高まったと考える状況を調査することで、さらに学生の自己効力感を向上させるための指導に活かすことが出来ると考える。

謝辞

稿を終えるにあたり、本研究に快く協力していただいた学生の皆様や関係者の方々に深く感謝申し上げます。

文献

- 1) 経済産業省：社会人基礎力，（オンライン）<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>，
（参照 2023-4-18）
- 2) 市川裕美子：看護学生の実習前後における社会人基礎力の自己評価. 八戸学院短期大学研究 41:39-49, 2015
- 3) 市川裕美子, 山之内靖子：看護学生 of 社会人基礎力の学年別自己評価と変化. 八戸学院短期大学紀要 56 : 161-166, 2018
- 4) 箕浦とき子, 高橋恵：看護職としての社会人基礎力の育て方. （東京都：日本看護協会出版会, 第2版 2018）
- 5) 日本看護協会：ナースセンター登録データに基づく看護職の求職・求人・就職に関する分析報告
（オンライン）<https://www.nurse.or.jp/nursing/>，（参照 2023-1-20）
- 6) 柏田三千代：新人看護職員の早期離職理由—心理的プロセスの検討. 国際情報研究 15 : 6-54, 2018
- 7) 奥田玲子, 深田美香：看護学生 of 社会人基礎力の経年的変化と影響を及ぼす経験要因. 米子医学雑誌 70 : 13-24, 2019
- 8) 経済産業省編著：社会人基礎力育成の手引き-日本の将来を託す若者を育てるために. （東京都：株式会社 朝日新聞出版, 2010）
- 9) 崎山愛, グレグ美鈴：臨床看護師が経験する良いチームワーク. 日本看護科学会誌 38 : 374-382, 2018
- 10) 厚生労働省チーム医療推進方策検討ワーキンググループ：チーム医療推進のための基本的な考え方と実践的事例集，（オンライン）<https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001ehf7.html>，（参照 2023-11-20）
- 11) 山口裕幸：チームワークの光と影. 心理学評論刊行会 63 : 438-452, 2020
- 12) リクルートマネジメントソリューションズ：Z世代の新人・若手の育て方・生かし方. （オンライン）
<https://www.recruit-ms.co.jp/issue/column/0000001041/?theme=starter>，（参照 2023-11-20）
- 13) 高木みどり：看護基礎教育における社会人基礎力に関する研究の動向. 大阪総合保育大学紀要 16 : 153-162, 2022